

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

春

2024

第4号

青いスピズ



伊与原新

藤岡陽子

三辺律子

川上和人

伊藤ハムスター

作品募集・入選作品

「お花見」春名伶

青いスピンの 目次

- 1 創作「オーロラを待って」 伊与原新
- 9 創作「ピンクの人魚」 藤岡陽子
- 16 作品募集・入選作品「お花見」 春名伶
- 22 エッセー「Yes, I know.」の訳は百通り?」 三辺律子
- 24 科学エッセー「犬の骨の記憶」 川上和人
- 26 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 28 コラム「目で読むSDGs図鑑」
- 30 コラム「世界の友だちの一日」
- 32 第二回「青いスピンの」作品募集結果発表

「スピン」って、何だか知っていますか？
本に付いている細いリボン、
しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、
ページにそつとスピンをはさんでおけば、
またいつでも、

その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、
物語からノンフィクション、イラストエッセーまで
さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、

あなただけの新しい世界を見つけてください。

オーロラを待って

伊与原新 絵・末山りん



「だから、何の絵だったつってんだよ。」

図工室のテーブルで、僕の向かいに座るコウキが隣のハル君をこづいた。コウキがさつきから何度も聞いているのに、ハル君が何も答えないせいだ。

ハル君は眼鏡に手をやっただけで、相変わらず眉ひとつ動かさない。僕も筆を持つ手を止めて、彼の絵をのぞき込む。

ハル君が何を描いているのかは、前回の図工の時間からずっと気になっていた。ひたすら黒い絵の具で画用紙を塗りつぶしていたからだ。今日は紙の真ん中あたりに、赤に黒を少し混ぜたような色の横線が短く描き加えられている。その正体はやはり見当もつかない。

「宇宙とか?」「んなわけないじゃん。」

同じテーブルの女子二人が口々に言う。そう、そんなわけはない。先生に言われた絵のテーマは、「いつかまた見たいもの・いつかまた行きたい場所」だ。

「これは——」ハル君が無表情のまま、ようやく口を開いた。「オーロラ。」

「オーロラ? 見たことあんの?」「どこで? カナダ? ノルウェー?」

目を丸くして矢継ぎ早に質問を浴びせる女子たちの横で、僕はもう一度ハル君の画用紙に目を凝らした。この赤黒い横線が、オーロラだというのだろうか。とてもそうは見えない。オーロラというのは緑色に輝いていて、カーテンのように波打っているはずだ。

どこの国で見たのかとしつこく聞かれ、ハル君は小さくかぶりを振った。

「これは——八王子。」

「は?」コウキが露骨に顔をしかめる。「おまえ何言ってるの?」

確かに。都心からずいぶん離れているとはいえ、ここ八王子市はれっきとした東京都の一部だ。北海道でオーロラが観測されたという話は以前聞いたことがあるけれど、東京でオーロラなんて見えるはずがない。女子二人の口調もとたんに冷たくなる。

「いつ見たの? それが本当なら大ニュースになったはずだけど。」「どうせ夕焼けか何かと見間違えただけでしょ。」

コウキがさつきより強くハル君の肩を押した。

「やっとしやべったと思つたら、つまんねえうそかよ。マジ訳分かんねえな、おまえ。」

コウキに何度もこづかれて、ハル君の眼鏡がずり落ちる。それでも彼は唇をきつく結んだまま、目の前の奇妙な絵を見つめている。

ハル君には、優しくしてあげなきゃだめよ——。

母さんの言葉が頭をよぎった。コウキを止めたほうがいいだろうか。でも、ハル君が訳の分からないいやつだということには、僕も同感だ。おまけにうそまでついたのだから、同情する気にはなれない。

どうしようか迷っているうちに、先生が近づいてきてコウキをひとにらみした。コウキはそしらぬ顔で自分の画用紙に向き直る。ハル君も何事もなかったかのように眼鏡をかけ直し、また筆を動かす始めた。

ハル君が江東区の小学校から転校してきたのは、今年の四月だ。それから半年がたつというのに、クラスには一人の友達もいない。休み時間はいつも自分の席で本を読んでいて、授業などで好きなよ

うにグループを作れと言われたら、最後までぼつんと教室の隅に立っている。

でもそれは、僕たちのせいじゃない。一学期の間はみんながハル君を気づかって、あれやこれやと話しかけた。もちろん僕もだ。なのに彼はこちらと目も合わさず、何を聞いても黙り込んだままか、せいぜい「うん。」か「まあ。」としか答えないのだ。そんな転校生の相手をいつまでも続けるほど、僕たちだって暇じゃない。

ハル君は、僕の家のおすぐ近くの古い一戸建てに、父方のおじいさん、おばあさんと三人で住んでいる。家庭の事情——たぶん何か複雑な大人の事情——で両親と離れて暮らすことになり、一人八王子に引っ越してきたらしい。これは、彼のおばあさんと以前から親しくしている母さんから聞いたことだ。

どんな事情かまでは教えてくれなかったけれど、母さんはハル君について「かわいそうな子なのよ。」と繰り返して、僕には怖い顔で「クラスで言いふらしちゃだめよ。」と念を押していた。

夜八時過ぎ、中学生の兄ちゃんといっしょにラッキーの散歩に出た。ラッキーはうちで飼っている柴犬だ。

リードを握る兄ちゃんの後についていつものコースを歩き、小高い丘へと続く坂道に入る。丘の上は公園になっていて、八王子の街がよく見わたせる。

階段を上って藤棚のある広場に着くと、すぐ左手のフェンスの際に大小二つの人影がある。ハル君と彼のおじいさんだった。おじいさんがこちらに首を回し、「やあ、こんばんは。」と声をかけてくる。

おじいさんとは僕も顔見知りで、道ですれ違えば挨拶ぐらひはする。「ワンちゃんの散歩かい？」おじいさんが目を細める。「はい。」と答えながら僕はそちらに近づき、二人の間に立っている背の高い三脚に目を留めた。てっぺんにりっぱなカメラが取り付けてある。レンズはフェンスの上から、北の方角を狙っていた。住宅街の明かりが広がっているだけの、どうってことない景色だ。「それ、夜景撮ってるんですか？」僕はおじいさんに聞いてみた。「夜景は夜景だけだね。」おじいさんは言った。「カメラの露光時間をうんと長くしたら、うっすらとでもオーロラが写らないかと思ってね。」

「オーロラ？」今日の凶工の時間を思い出し、ハル君の方を見やる。ハル君はこちらに目もくれない、じつと正面の低い空を見つめている。「まあ、可能性はほとんどないと思うけど。」おじいさんが苦笑いを浮かべた。「二日ほど前に、太陽の表面で大きな爆発があつてね。その爆風が地球まで届いて、今夜は大きな磁気嵐になっているらしいんだよ。」

方位磁針が北を指すのは、地球が大きな磁石になっているからだ。そんな話は理科の授業で聞いた記憶がある。おじいさんによれば、地球の磁気が乱れるのが磁気嵐という現象で、活発なオーロラを引き起こすのだという。磁気嵐やオーロラの発生に関して予報を出している、研究機関などのサイトがあるそうだ。おじいさんは続けた。

「今回の磁気嵐はかなり規模が大きいんだ。北海道でもオーロラが見られるんじゃないかってことで、

今あつちには研究者や写真家が大勢集まってるようだね。」

「でも、だからって、東京でオーロラなんて……。」

「ありえないことじゃない。」ハル君がいきなり言った。「現におじいちゃんは見た。ここで。」

「マジで？ いつ？」

そのとき、藤棚のほうで兄ちゃんが僕を呼んだ。ラッキーもせかすようにほえている。がぜんハル君の話に興味が出てきた僕は、先に行ってくれるよう頼んだ。おじいさんも横から、「後でお宅まで送り届けますから。」と言ってくれた。

おじいさんは上着のポケットからスマホを取り出し、一枚の写真を見せてくれた。オーロラが写っているのかと思ったら、色あせた古い絵を撮ったものだ。黒く塗った山影のすぐ上に、赤く短い横線が描かれている。

「昭和三十三年——一九五八年だから、もう六十年以上前のことだけだね。私は君らと同じ五年生だった。忘れもしない、二月十一日の夜八時過ぎ。おふくろにお使いを頼まれた帰り道、何気なく北の空を見ると、山の際の空がぼんやり赤いんだ。山火事かなと思って、この丘に上って眺めていたんだが、どうも様子が違う。その翌朝、新聞を見て驚いたよ。」

その夜、北海道はおるか、秋田、新潟、長野、群馬など、日本の北半分の広い範囲でオーロラが観測され、大ニュースになったのだという。それを知ったおじいさんが記憶を頼りにすぐ描いたのが、この写真の絵だそうだ。

「オーロラを見たと小学校で言っても、誰も信じてくれなかった。」おじいさんは眉尻を下げた。「人

にその話をするともなくなっていたんだけど、十年ほど前、市の科学館でオーロラ研究者の講演会があると聞いて、参加してみたんだよ。講演会のあと、思い切ってその先生にこの絵を見せたら、なぜか大喜びしてね。」

その研究者は一九五八年二月十一日のオーロラについても研究していて、詳しい計算の結果、オーロラのいちばん高い部分がぎりぎり八王子から見えたことを突き止めていたという。八王子での目撃証言は当時ほかにも二件ほどあったそうだ。

「研究資料にしたいとその先生が言うんで、絵のコピーを送ってやったりもして。うれしかったねえ。あれが本当にオーロラだったってことが、五十年越しにはつきりして。」

「すげえ……。」

僕は心の底からそう言っ、もう一度おじいさんのスマホの画面を見つめた。そういえば、ハル君の絵とよく似ている。つまりハル君は、おじいさんが昔見たオーロラをいつかまた自分も見たいと考えて、あんな絵を描いたわけか。うそをついていたわけではないのだ。

「今夜がだめでも、まだ可能性はある。」ハル君が眼鏡に手をやって、きつぱりと言った。

どういことかとたずねると、学校での彼からは想像もできないような早口でいくつか教えてくれた。

太陽の活動はおよそ十一年の周期で強まったり弱まったりしていて、活動のピークにあたっている今年は大きな磁気嵐が起きやすいということ。オーロラは下側が緑色に、上側が赤色に光るので、カナダや北欧に比べて緯度の低い日本から見えるのは、上の端に近い赤い部分だけだということ。明治

時代には一度、四国や中国地方でも赤いオーロラが見られたこと、などだ。

「ハルは将来、科学者になりたいそうだね。」おじいさんが優しい声で言う。「八王子に越してきたら私とオーロラ観測ができるから、よかったと。以前この子が住んでいたところは、ビルばかりで空が開けてないからね。」

また北の空に向けたハル君の横顔を見つめながら、家に帰ったら母さんに伝えようと僕は思った。ハル君はかわいそうな子なんかじゃない、と。

「磁気風つてのがまた起きて、ここでオーロラを待つときはさ。」僕はハル君に言った。「僕も誘ってくれない？」

ハル君は前を向いたまま、小さく、でもはっきりとうなずいた。

参考文献

「日本に現れたオーロラの謎 時空を超えて読み解く「赤気」の記録」片岡龍峰・著 化学同人（二〇二〇）

伊与原新 作家。著書に「宙わたる教室」「八月の銀の雪」「青ノ果テ」などがある。

ピシクワの人魚

藤岡陽子

絵・萩結



パラソルが作る楕円の影の下で、坂井青波は動画を眺めていた。さつきから繰り返し再生しているのは、バレー部の仲間からのメッセージ。一人一言の挨拶の後、最後は部員全員が声をそろえて「青波、これからもずっとずっと友達だよ！」と励ましてくれている。

「青波、泳がないの？ せっかく海に来たのに携帯ばかりいじってるじゃない。」

隣に座る母が、非難めいた口調で画面をのぞいてくる。小さなレジャーシートに二人並んで座っているのだが、母の大きなお尻が半分以上を占領していた。

「海きれいだよ、透明感半端ないよう、ねえ青波、どうしてそんなに機嫌悪いの？」

七月一日付けで父が転勤になり、青波は一学期が終わる三週間前に海があるこの町に引っ越してきた。でも海にも、海がある町にも、正直言って興味はない。

「機嫌？ 悪くなるに決まってるじゃん。中二の七月に転校って、ひどくない？ 夏季大会の前だよ？ それに私、三年生が引退した後はレギュラーになれる予定だった

「新しい学校でバレー部に入れば？ あるんでしょ？」

「入らない。できあがったチームに今更なじめないし。」

母には言っていないが、転校先の中学校のバレー部の練習を、ちらりと見学したことはある。体育館は前の学校と同じ油とほこりの匂いがしたが、あたりまえだけどこににいるのは知らない人ばかりだった。青波が練習を見ていたら、バレー部員の一人が「何か用？」と近づいてきて、思わず無言で逃げてしまった。「私も入れて。」と

無邪気に歩み寄った小学生の頃とは違う。

「でも部活に入れば仲良しの子ができるでしょ。友達作りのためにもバレー部に入ったら？」

「だからもういいって。部活はしない。バレーなんかやったって、大人になっても何の役にも立たないし。」

「そんなことないよ。頑張ってきた時間はちゃんと力になってる。生きるための強さになって、いつか自分や、自分の大切な人を守ってくれる。」

「ないない。そんなわけない。現にお母さんにしても、シンクロやってた意味あんの？ お母さんなんて、何の

たのに……。」

やばい、泣きそうだ。青波はそれ以上の言葉を飲み込み、海の一点を見つめた。本当なら今頃、体育館でバレーボールの練習をしていたはずだ。今のチームはみんな仲が良くて、雰囲気も最高で、できることならあのままずっといっしょに……。

「こんな中途半端な時期に転校させたことは、お母さんも悪いと思ってる。でもお父さんと相談して、今はまだ家族いっしょに暮らそうって決めたのよ。青波が高校に入ったら、もう転校はさせない。お父さんに単身赴任してもらうから。だから今回だけは……。」

「もういいっ。分かったからっ。」

父は保険会社に勤める転勤族だ。まだ幼くて住んでいた記憶がない土地も含めると、仙台、名古屋、浜松、前橋、東京と、青波はこれまでも転々としてきた。小学校は三回転校したし、中学では今回が初めてだけれど、今後もどうなるか分からない。青波だけではない、五歳年下の小三の弟、泳斗も被害者だ。

取り柄もないじゃん。お菓子ばっか食べてるせいで体重増加も半端ないし。はつきり言ってそのはでなラッシュガードも恥ずかしいから。何でピンクとか選ぶかなあ。もつと黒とか紺とか地味なのにしとけばいいのに。お母さんがピンクなんて着たらブタだよ、ブタ。おばあちゃんの家にあるピンクのブタの貯金箱そっくり。」

言い過ぎだ、と思ったが止まらない。だって、このいらだちをぶつけられる相手は母しかないから。

「それ言われたらきつい。確かにシンクロやってたときから比べると、十キロ近く体重増えたからなあ。あ、今はシンクロって言わないんだって。アーティスティックスイミングだ。」

へらっと笑いながら水平線に視線を移す母を、青波は横目で見ていた。母は九歳から大学四年生までの十三年間、シンクロナイズドスイミングをしていたらしい。現役の頃は百メートルもの距離を潜水したり、体におもりを付けて立ち泳ぎを続けたりハードな練習をしていたというが、今は見る影もない。普通のぽっちゃり太ったお

ばさんだ。

「ほらね。だからさあ、部活なんてやっても意味ないんだって。実際に……ちよつと、私の話、聞いている？ ねえ、お母さんってばっ。えっ、どうしたの？」

目を細めて水平線を眺めていた母が、突然立ち上がった。青波の左側に小さな風が巻き起こる。

「あそこ……人が溺れてる。青波、すぐにライフセーバーの人呼んできてっ。早くっ。」

母が早口でまくし立て、砂を蹴って海へと走りだした。まっすぐ、ものすごい速さで海に入っていくその背中を、青波は全身を硬くしながら見つめていた。

「お母さんっ！」

やっとな声が出たときはもう、母は海の中に消えていた。

「……青波、どうした？」

肩をぽんとたたかれ、我に返る。

「あ、お父さん……。」

「かき氷買ってきたぞ。青波はレモン味でよかつ……。」

「お父さんっ！ 人が溺れてるんだってっ。ライフセー

波に体を持っていかれそうになりながら、青波はボートをこぐ男子に尋ねた。

「い……今、あつちに……。友達が、溺れて沈んで……。そしたら女の人が泳いできて、『私が助けるから大丈夫よ。』って潜ってくれて……。」

色を失った唇をぶるぶると震わせながら、男子がオレンジ色のブイが浮く方を指差す。潜っていると聞き、青波は十数メートル先に目を向けた。だが目を凝らしても銀色の海面があるだけで母の姿は見えない。

「その女の人、私のお母さんなんです。」

そうつぶやくと、唇を震わせていた男子の目から涙がこぼれ落ちる。その泣き顔は子供のように幼くて、青波は下唇を強くかみ締めた。

「青波っ。」「青波っ。」と自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、振り返ると父と泳斗が手で合図をしているのが見えた。浜辺に戻ってこい、と叫んでいる。二人が呼んできたのかライフセーバーが、細長い浮き輪——ライフガードチューブを片手に持ち、浅瀬を一気に駆けてくる。

バーを呼んでできてっ。急いで、早くっ。」

父に向かってそう叫ぶと、レジャーシートの上の浮き輪を手を取った。さっきの母のように砂を蹴り、海に向かって思いきりダッシュする。まっすぐに。お母さん、お母さん……と胸の内でお母のことを呼びながら。

波の音も人の声も、もう何も聞こえない。

お母さんを助けなきゃっ——。

青波は頭から浮き輪をかぶり、水しぶきを上げて浅瀬を走ると、そのまま勢いをつけて海に飛び込んでいった。

浜辺から二十メートルほど離れると急に足が着かなくなり、それ以上沖に進むのが怖くなった。体を反転して、海底に足が届く場所まで戻る。すると青波の後を追うかのように黄色いボートが近づいてきた。ボートには高校生くらいの男子が乗っていて、今にも泣きだしそうな顔で必死にオールを動かしている。

「すみません、こっちの方に女の人が泳いでこなかったですか？」

「あそこですっ。あのオレンジ色のブイの辺りで、私のお母さんが潜っていますっ。」

砂浜に戻る途中、すぐそばを走って通り過ぎようとしたライフセーバーに向かって、青波は叫んだ。

「分かりました。危ないから、君は戻って。」

ライフセーバーが水をさくようなクロールで母の元に向かったらちょうどそのとき、波に漂うオレンジ色のブイが大きく揺れた。

「お母さんっ！」

母が水の上に顔を出している。間違いない、あれは私のお母さんだ。青波はその場に立ち尽くしたまま、母を見ていた。目を凝らせば母が両腕で人を抱え、立ち泳ぎをしているのが分かった。

「青波っ！」

「お姉ちゃん！」

いつのまにか、父と泳斗が青波の近くまで来ていた。二人とも不安げな顔を沖の方に向けている。ライフセーバーはすでに母の所にたどり着いていた。

母に抱かれていた人影が、ライフセーバーの手に渡る。ライフセーバーが、溺れていた人の体にライフガードチューブを巻き付けるのを、母が立ち泳ぎのまま手伝っている。

「お母さ——ん！」

互いの顔がはつきりと分かるくらい近づくと、青波は母に向かって大きく手を振った。母は青白い顔で立ち泳ぎをしながら、青波を見て笑ってみせる。すでに連絡を入れていたのか、海岸にはライフセーバー以外にも警察や消防の人たちが集まってきていた。

「お母さんっ、大丈夫？」

母が浅瀬にたどり着くと、青波は膝で水を蹴って駆け寄っていった。後ろから泳斗と父もついてくる。

「平気よ。でも風が……風が強くて流されるかと思った。

青波、ライフセーバーを呼んでくれてありがとう。」

肩で息をしながら、母が手を伸ばし青波の髪をなでてくれる。水中にいたからか、手が氷のように冷たい。

「助かるといいんだけど……。」

があり、大学時代にはライフセーバーの資格を取得していたといい——」

母のこの救助劇は、数日後の新聞の地方版に大きく取り上げられた。新聞の記事によると、男子高校生は海岸から四十メートル離れた、水深二メートルの海底に沈んでいたという。救助された後ドクターヘリで病院に運ばれ、その後意識を回復したらしい。

「お母さん、新聞に載るなんてすごいね！」

泳斗が母の写真が載った新聞記事をはさみで切り取っている。父は同じ新聞をあと十部ほど買って帰るからと言いつ残し、仕事に出かけていった。

「恥ずかしいなあ。感謝状はいただいたけど、本当はものすごく怒られたのよ。」

二次被害につながりかねない行為ですよ、と確かに母は厳しく注意を受けていた。それでも救助した男子の両親からは「あなたがいてくれてよかった。」と涙を流してお礼を告げられた。誰もができることではない。男子を救助したライフセーバーにも、母はそう褒められてい

救助された男子が、担架に乗せられ運ばれていく。母は「気道を確保しながら運んできた。」と言うが、男子の顔は紙のように真っ白だった。

「お母さん、もうこんな危ないことしないでよっ。」

本当はもっと別のことを言いたいの、声がとがる。

心配でたまらなかつたから、その分声が荒々しくなる。

「ごめんね、もうむちゃはしない。」

本当は、よく頑張ったね、と言いたかった。自分より背の高い男子を抱えて海面に現れた母は、まるで人魚のようだったから……。

優しくタフな人魚。

力強く泳ぎ続けるピンクの人魚は、涙が出るほどかっこよかった。

「海水浴場で溺れていた高校一年生の男子生徒（16）を素潜りで引き揚げて救出したとして、遠見市沢区の主婦、坂井渚さん（38）に遠見海上保安部が、感謝状を贈った。坂井さんはシンクロナイズドスイミングの経験

た。

誰もができることではない——。

青波もそう思う。十三年間シンクロナイズドスイミングを続けてきた母だから、できたことだ。

「お母さん、これ書いて。」

通学用のリュックに入れたままになっていた「入部届」と印刷されたプリントを、母に手渡す。入部先の「バレー部」と「坂井青波」という氏名はすでに書いておいた。あとは保護者名を記入するだけだ。

「夏休み中も練習あるみたいだから、今日早速行ってみる。十時開始だし、そろそろ出かけなきゃ。」

バレーボールを続けることに、何の意味があるかは分からない。でも今やりたいのなら、頑張るほうが断然かっこいい。

そしていつか大人になったら、私は言うのだ。

頑張ってきた時間はちゃんと力になってる。

生きるための強さになって、いつか自分や、自分の大切な人を守ってくれる。

真白は目的地を知ることをあきらめて、真夜中の散歩を楽しむことにした。人が全くいない。空には星がいくつも散らされている。冷たい風が鼻をつんと痛めつける。獣に鉢合わせる不安はない。興奮を覚えることも胸が踊ることもないが、悪くない。

雪也は暗い方、暗い方に進みたがっているようで、明かりから遠ざかるように歩けば、自然と山に近づいていく。

山の麓には寺が建っている。住職のいない寺で、その荒れた外観は昔から根も葉もないオカルト話を作ってきた。裏手に捨てられた古い墓石も、恐怖を助長させるばかりだった。ふだんであれば、夜中でなくとも近づきたくない。真白よりも雪也のほうがそうだろう。雪也は怖がりだ。怖い話を聞いていっしょに寝てと泣きついてくるのは、いつだって雪也のほうだった。

だが、真白はこの夜、恐怖らしい恐怖を抱かなかった。寺の屋根が見えてきても変化はなかった。自分がそうであるのだから、雪也の背中がりと伸びていることも簡単

と分かった。この道は寺が終点なはずなのに――。真白は辺りを見回す。右も左も、後ろさえ真っ暗で、頭上のちりのような星しか観測できない。

おとなしくついていくと、古いアスファルトの道は不意に山道に変わった。雑草もなく、ひからびた表土がさらされている。両脇には竹だろうか、背の高い木々が生い茂っている。

「どこに行くんだ？」

耐えきれずに尋ねた。雪也は答えた。

「お花見だよ。」

そういえば、風が吹かない。雲が動かない。獣が鳴かない。地面を踏む音が立たない。人の営みを感じられない。

暗く細い山道はいつまでも開けず、その間、真白は同じ質問を三度繰り返した。雪也の答えもその口調も全く同じだった。

一時間にも二時間にも感じたが、けんたい感や足の痛みはなかった。息も上がっていない。汗もかいていない。

単に受け入れられた。

頭上では無数の星が輝いている。過去の光を今、地球上で観測しているのは、雪也と真白のほかには何人いるだろう。

寺には七段の階段がある。階段の手前に街灯が一本立っている。

下から懐中電灯で照らすと、寺の屋根と一本の老いぼれた梅の木が見えた。

「雪也の嫌いな梅の木だ。」

真白がつぶやくと、雪也は不機嫌な顔で振り返った。

「いつの話？」

「去年まで、あの梅の幹がおじいさんの顔に見えるって泣いていただろ。」

「もう泣かないよ。」

「……まあ、そうだろうけど。」

雪也の行く先は真っ暗で、化け物の腹に飲み込まれてしまったような気持ちになるが、ひびの入ったアスファルトの道が雪也の数歩先まで続いていることははつきり

闇に向かって細く息を吐いても、吐息は白く色づかない。

不意に目を焼かれた。前方から強い光が差した。空が白むという前兆もなく山の背から太陽が現れたかのよう。な照らし方だった。数秒おいて目を開くと、まず雪也の顔が見えた。目をいっばいに細めた、雪也がはしやいでいるときの笑い方だ。次に無数の丸い光の玉が目に入った。それらはゆっくりと天へ上がっていき、ある高さに至ると弓なりの空にびたりと張り付いて、そのとたんに光の玉は色を変えた。赤、青、黄、紫――。

光の玉を追って右へ左へさまよう視線は、最後に、雪也の背後から差す最も大きな桃色の光を探った。

「ね？　きれいでしょ？」

広大無辺の開けた空間に雑草はない。地面を覆うのは浅く張られた透明の水で、雪也のすねをぬらしている。真白の足はぬれていない。あと半歩動かせば、真白もその水の温度を知ることができる。

中心に一本の桜の木が立っている。幹が太く、樹高は高い。直径は三メートルほどあって、高さは電柱を優に

越している。たくましい枝を目いっぱい広げている。天をまっすぐに指している枝もあれば、しな垂れている枝もある。枝先を彩るのは無数の桃色の光だ。規則的に点滅して、木陰を桃色に色づけている。

幻想的な景色に息をのんだ。雪也は満足そうに笑った。「兄ちゃんに見せたかったんだ。桜、好きでしょ？ 僕も桜が好きなんだ。兄ちゃんと同じ理由で好きなの。去年みんなでお花見に行ったの、楽しかったよね。お父さんが飲んだくれちゃってたいへんだったけど、桜餅を食べたり、お母さんの作ったおいなりさんを食べたりにして、じいちゃんもばあちゃんもいて、すごく楽しかったよね。」雪也は手を差し出す。

「ねえ、もっと近くで見ようよ。あの桜の木ね、花びらが食べられるんだ。すっごく甘くておいしいの。」

これ、プレゼント——。雪也がくれたプレゼントはペンケースだった。ファスナーが壊れて使い物にならなくなったのを知っていて、だからこそ喜ぶことを確信している、雪也が浮かべていたのはそんな表情だった。

当時と全く同じ表情の雪也に手を伸ばして、真白はその手で自分の顔を覆った。

「……ついていっちゃまずいよなあ。」

ため息にほとんど埋もれた声を聞いて、雪也は目を細めて地面を見下ろした。

「そっか、ここまでなのか。」

置いていかれた子供のような声。しかし、大人びている。

真白ははじかれたように顔を上げた。

「じゃあ、また今度にしようか。」

雪也は予想外に明るい声を出して、満面に笑みを広げ



て、「ばいばい。」と気さくに手を振った。

パチンと泡がはじけた。

「——真白、大丈夫？ 代わるから、少し横になってきたら？」

目を開いた。隣に叔母がいて、心配そうに真白の顔ののぞき込んでいる。真白は正面を見つめた。夢うつつの境を確かめた。

「……うん、大丈夫。」

香炉の中、線香が今にも燃え尽きそうだ。真白は新たな線香を手に取り、ろうそくの火にかざした。

初めまして、翻訳家の三辺律子といいます。早速ですが、「翻訳」ってどんなイメージですか？ 皆さんの中にはもう、学校で英文を日本語にする勉強をしている人もいますよね。

では、いきなり問題。次の文を訳してください。

“Yes, I know.”

何だ、簡単って思ったかたも多いですよ。 「はい、私は知っています。」これで、試験なら合格です。でも、「翻訳」だと？ 日本語で「私は」と書いてあったら、話し手は女の子だと思う人が多いかもしれません。もし男の子なら、「僕は」にする？ でも、同年代どうしの会話だったら？ 「ああ、俺、知ってるよ。」とか？ 昔の超お嬢様だったらどうでしょう？ 「ええ、わたくし、知っておりますよ。」なんて言うかもしれません。じゃあ、千年生きている大魔法使いは？ 「そうじゃ、わしは知っておるぞよ。」では、王様。「ふむ、余は知っておる。」家来。「ははあ、拙者は存じております。」クレヨンしんちゃん。「うん、オラ、知ってるゾ。」(たぶん)。

つまり、同じ「Yes, I know」でも、いろいろな訳し方があるということですね。これは、日本語学者・金水敏さんの「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」という本に載っていた問題をアレンジしたものなのですが、日本語には、この例のように話し手の年齢や性別、仕事、時代、性格などを想像させる言葉遣

い(役割語)があります。分かりやすいのは、「私」「僕」「俺」「わし」「おいら」「うち」などの一人称代名詞でしょう。「僕」と「ぼく」と「ボク」だって、受ける印象が違いますよね。

ですから、物語を翻訳するときは、時代や舞台などの設定、登場人物の年齢や性格、誰と話しているか(目上の人だったら丁寧になりませうね)などを考えながら、せりふを訳していくことになります。

それだけではありません。例えば、私の訳した「パンツ・プロジェクト」(キャットトーク・著)という本には、体は女の子で、心は男の子の中学生リブが登場します。リブの一人称を訳すときは、悩みました。英語の「I」に性別は関係ありません。「私」？ でも、自分を女の子だと思っていないリブは使わなさそう。かといって、「僕」や「俺」にも違和感はあるし……。結果として、私は「一人称代名詞は使わない」という方法を取りました。つまり、「うん、私(僕)、知ってる。」の代わりに、「うん、知ってる。」と訳すという意味です。日本語は主語を省略することが多いので、それでも何とか訳せました。リブの「自分は女の子ではない」という気持ちをくんだ翻訳になっているといいなと思います。

翻訳にはほかにも考えなければいけないことがたくさんあります。例えば、映画の字幕。あまり長いと、時間内に読みきれませんし、かといって、省略しすぎたら、ストーリーが分からなくなってしまいます。ですから、そのせりふの発せられた意味をよく考えて、スペースに収まるよう翻訳しなければなりません。だから、映画「タイタニック」の

“I'm the king of the world!” 「世界は俺のものだ！」

なんていう名訳も生まれるのでしょね。

どうでしょうか？ これから外国のものを读んだり見たりするとき、翻訳にも少し注目してみてください。おもしろい発見があるかもしれません！



あれは小学三年生の頃だったと思う。学校行事で遠足に出かけた。行く先は墓地公園である。墓地公園は小高い丘の斜面に広がる市営の墓地だ。今から考えると墓地が目的地というのも珍しい気もするが、当時は特に疑問はなかった。この墓地の下からは弥生時代のお墓が見つかっている。つまり、二千年以上にわたり墓地であり続けている由緒正しい墓地なのである。

私たちは墓地でお昼ご飯を食べ、墓地で自由時間を遊んでいた。そのとき友達が、全身の骨が残るきれいな犬の白骨死体を見つけた。最近では野犬を見かける機会も減ったが、当時は住宅地でも野犬がうろついていた。ときには小学校の廊下をてくてく歩いていた時代だ。墓地公園の片隅に犬の死体があっても不思議ではない。

これはすごいものを見つけてしまった。

そう思った私たちはめいめいに骨を手を取りリュックにしまった。そのときその骨は宝物にしか見えなかった。手に入れたのは七、八人ぐらいたったと思う。私は何だか誇らしげな気持ちになった。先生にばれるときつと怒られる。皆がそう考え、骨を拾ったことは誰も口にしなかった。しなかったつもりだが、すぐにばれた。

「犬の骨を持っている人、すぐに出しなさい。」

怖い顔の担任にそう言われ、みんなしぶしぶ骨を元の場所に返した。しかし、私は出さなかった。別に抵抗しなかったわけではない。何となくタイムリングを逃したのだ。

みんなが素直に返すとそれ以上の追及はなかった。しかし、家に帰り着くと急に恐怖と嫌悪に襲われた。先ほどまで宝物だった骨が、死体の一部なのだという実感がわいてきたのだ。私は骨を庭の端に埋め、そこは私にとって近づいてはいけない場所になった。

大人になった私は鳥類学者となり、研究のために骨の標本を集めるようになった。ときには化石を発掘し、ときにはネコのふんの中身を調べる。そこから見つかる鳥の骨と見比べるためだ。

鳥の死体を拾い、解体し、洗い、きれいな標本にする。かつての嫌悪感はもうない。野生の世界では死もまた自然の一部だと理解できたからだ。毎年たくさん動物が生まれ、同じ数だけ死んでいく。死体はカラスやネズミやアリに食べられて分解される。骨は土の中で溶けていく。死体は生態系の中に取り込まれ、生きている動物や植物の栄養になる。

小学生の頃に抱いた嫌悪感は今も忘れていない。それはそれで正常な感覚だったと思う。しかし、当時の恐怖は今では敬意に変わっている。たくさんの骨を見比べることで、骨というものが何千万年もの時間をかけて進化した無駄のない美しい形を持っていることを強く感じるようになったのだ。

あの骨を拾ったときに誇らしく思ったのは、もしかしたらその美しさに魅力を感じていたからかもしれない。これがその後の私の研究に連なる最も古い記憶である。

学校あるある

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

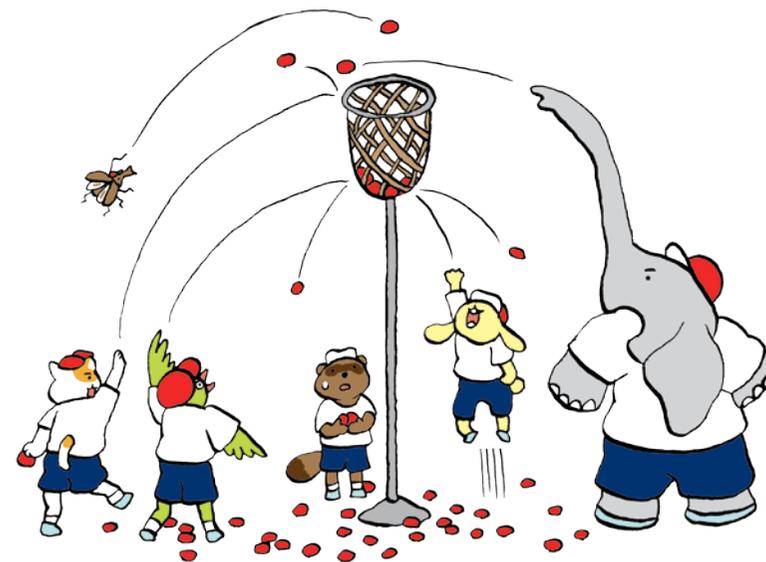
伊藤ハムスター



第四回!!



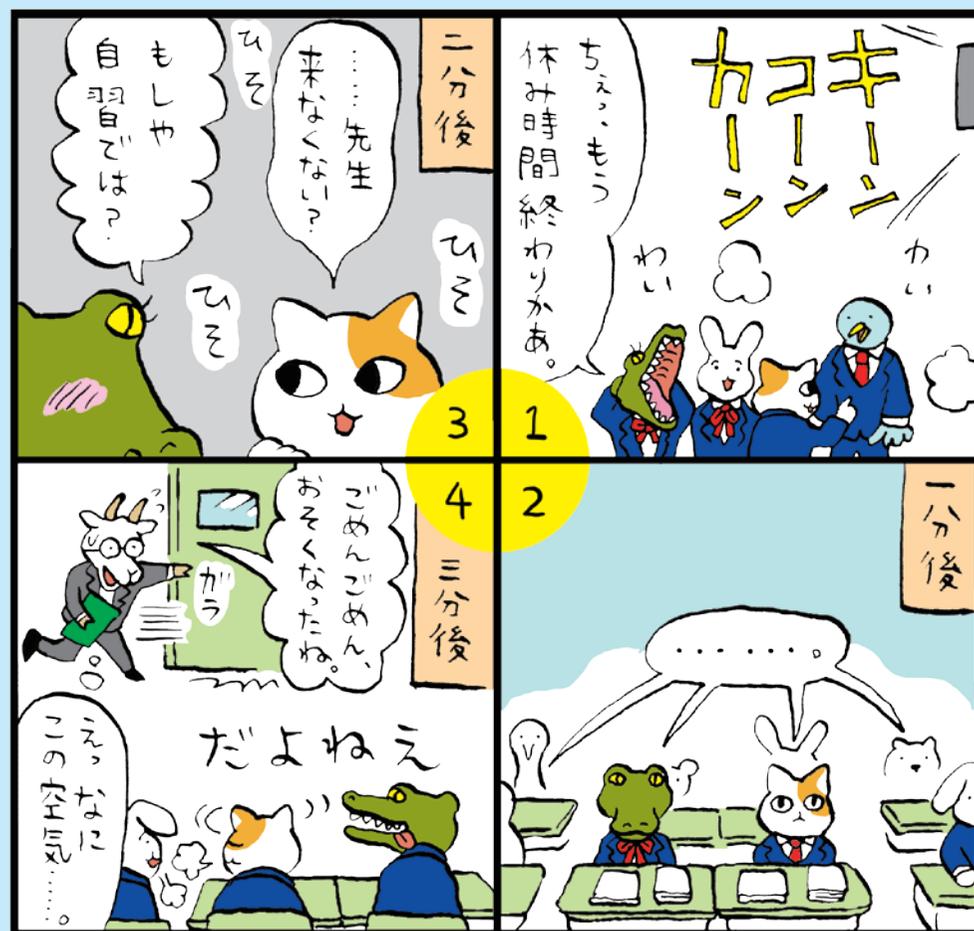
運動会の玉入れ、意外と難しい。



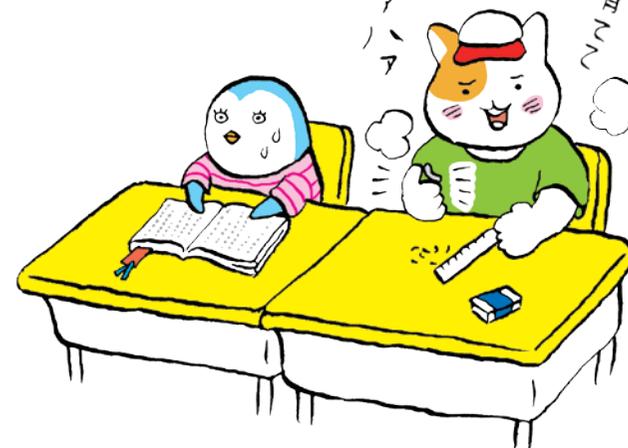
クラスがえて一喜一憂する。



自習を期待した直後に先生が来る。



消しゴムのかすで
練り消し作りがち。



今日から私たちにできること

1 | 自然に親しむ



自然観察会や生き物調査などに参加すると、テレビやインターネットでは分からない発見や学びがあります。生き物図鑑やスマートフォンのアプリなどを活用し、名前を調べてみましょう。名前を知っているだけで、それらが今までよりもっと身近に、大切に感じられるようになるでしょう。

2 | 森林保全に配慮した商品を選ぶ



森林保全に配慮した商品を選ぶことも対策の1つです。最近では、「FSC®」や「PEFC」などの認証マークが付けられた商品を扱う企業も増えてきました。このマークは、適切に管理された森林から生産され、適切に流通・加工されていることの証。まずは身の回りにあるパッケージなどのマークをチェックしてみましょう。

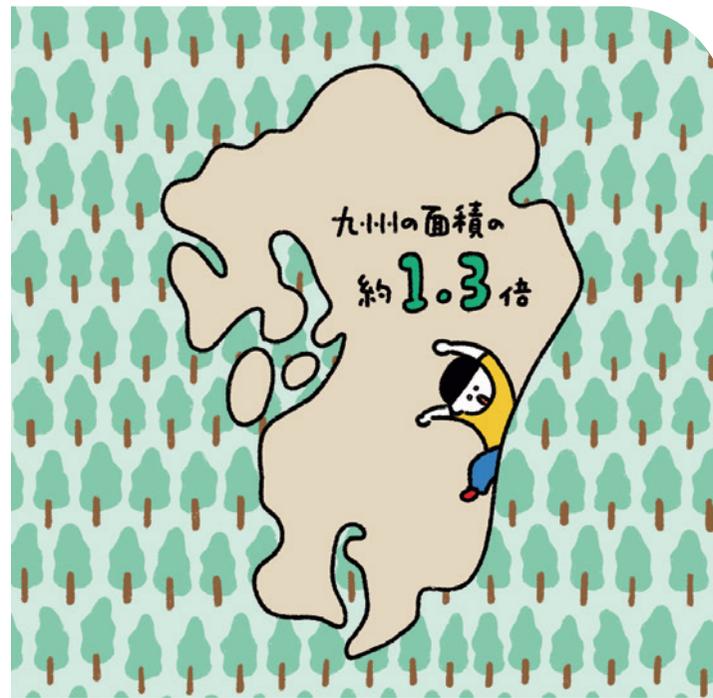
3 | 森林破壊と保全について学ぶ



森林破壊の問題は、とても複雑。家の人や学校の先生でも納得のいく答えを出せないかもしれません。だからこそ、世界中の人たちで考えなければならぬわけです。森林破壊を取り扱っている書籍やインターネットの資料などを読んで、森林を守るヒントを探してみましょう。

1年間に世界で失われている

森林の広さ



世界では、年間約470万ヘクタールの森林が失われています。この広さは、九州の面積の約1.3倍。これをまた元の状態に戻そうと思っても、数十年かかってしまいます。

「世界人口はどんどん増え続けています。増えた分だけ食料を供給しなくてはなりません。農地や放牧地は不足しています。そうなると、森林を切り拓くしかないわけです。」と、吉田先生は話します。

樹木の成長を上回るスピードで、森林が減少する状態を「森林破壊」といいます。深刻化しているのは、アフリカや南米などの森林。現地の森林保護のための法律を守らずに木材や燃料用に木が無秩序に伐採されていることも一因です。が「農業活動が原因の大部分を占めている。」と、吉田先生は話します。

インドネシアやマレーシアなどの東南アジアの熱帯林がアブラヤシの農園に転換されることによって森林が大きく減少しています。パッケージの成分表には「植物油」と表記されることが多いため見落としがちですが、パーム油はあらゆる食品に含まれています。チョコレート、スナック菓子、インスタント麺……と、スーパーマーケットに並んでいる食品は、パーム油を使ったものばかり！私たちが豊かで便利な食生活を求めるほどに、森林破壊が助長されているともいえます。

「森林の減少スピードは1990年代と比べて、ゆるやかに」

追われています。さらに、ゾウが食料を求めて農園に踏み入って、農地や家屋を破壊するケースも少なくありません。」

森林破壊は、緑が失われるだけではなくありません。樹木の幹や根が燃やされたり、分解されたりすることにより、二酸化炭素が空気中に放出されます。すると、地球温暖化が加速して、異常気象を招くこととなります。また、森林が減って、風で土が飛ばされたり、雨で土が流されたりするなどして、砂漠化につながることもあります。さらに、森林破壊は、野生生物に悪影響を及ぼすことも……。

「インドネシアのスマトラ島では、オランウータンやゾウがすみかを

追われています。さらに、ゾウが食料を求めて農園に踏み入って、農地や家屋を破壊するケースも少なくありません。」

森林と共存するために今日からできること

今後、森林とどのように共存していくのか。これは、開発途上国だけの問題ではありません。私たちを含めた、世界中の人たちが向き合わなければならないのです。「森林を優先するか、人々の生活を優先するか。これはとても難しい問題です。だからこそSDGsの目標に『陸の豊かさも守ろう』を取り上げられているわけです。」

まずは、森林破壊について自分なりに考えてみるのが大切。本やインターネットの記事などで、森林破壊を取り巻いている現状を調べたり、森林保全に配慮した商品を積極的に買ったりすることも一つの向き合い方です。

「自然に親しむと、森林破壊と保全への理解も深まります。」と、吉田先生。例えば、自然観察会に参加したり、ハイキングに出かけたり……。スマートフォンのアプリで、樹木の名前を調べてみるのもおすすめ。「ケヤキ」や「マツ」「スギ」など、名前を知るだけでも自然がぐっと身近になり、問題意識がより高まるはずですよ。



「ゾウの森とポテトチップス」(そうえん社) 写真・文:横塚真己人 1,430円(税込)

マレー諸島に位置するボルネオ島は、熱帯雨林におおわれた大自然の宝庫。しかし、森林破壊によって、鳥で暮らすゾウの命がおびやかされることに……。

森林について学べる本

現在、森林破壊を食い止めるために、さまざまな調査や研究が進められています。一部の成果は書籍にまとめられており、なかには小学校低学年からでも読める児童書もあります。吉田先生のおすすめは「ゾウの森とポテトチップス」(そうえん社)。読んだら、親しい人におすすめしてみてください。

目で読むSDGs 図鑑

世界の森林を守るために、私たちに何ができる？

現在、世界の森林面積が年間約470万ヘクタール、減少しています*。アフリカや南米、東南アジアなどにある開発途上国を中心に起こっている問題ですが、私たちの生活とも無縁ではありません。私たちの生活と森林破壊はどのように関わっているのでしょうか。

年間約470万ヘクタールの森林が失われている

みなさんは、世界の森林面積が陸地全体の何割を占めているか知っていますか？ 全体の半分程度？ それとも、陸地をほとんどおおいつくすほど？

正解は、陸地全体の3割くらい。約40億ヘクタールです。しかし、森林は日々減少し続けています。2010年から2020年にかけては、毎年約470万ヘクタールの森林が失われました。これは、九州の面積、3万6千780平方キロメートルの約1.3倍にあたります。

新たに農地を拡大するのは、輸出の作物を栽培するためでもあります。コーヒー豆やカカオ豆などが代表例ですが、2000年代以降は、アブラヤシからとれるパーム油の需要が世界的に拡大。これらを輸入に頼っている国の中には、食料自給率の低い日本も含まれています。

監修

国立環境研究所 資源循環領域主任研究員



よしだあや 吉田綾先生

ごみ問題やリサイクルの現状を通じて、持続可能なライフスタイルを研究している。

* FAO(2020)Global Forest Resource Assessment 2020. (国連食糧農業機関「世界森林資源評価2020」)より

プロフィール

名前

Connor Quade
コナー・クウェイド
(中学1年生・12歳)

好きなこと・もの

アイスホッケー、ビデオゲーム、
お金、食べ物、友だち

好きな教科

数学、合唱、体育

習い事

ピアノ、アイスホッケー、体操

好きな食べ物

ピザ、ステーキ、タキートス(小さなタコス)

行ってみたい国

イタリア

地球のために

ふだんやっていること

節電、節水。冷暖房の使用を必要最低限にする、使い捨てるものをなるべく使わない、ごみの分別。

将来の夢

科学を生かせる仕事

日本について知っていること

すばらしい食べ物や文化がある。
いつか寿司を食べてみたい。

今欲しいもの

友だちと遊ぶためのおこづかいが足りない。もっとやりたいことや好きな食べ物に使えるお金が欲しい!

コナーさんの1日

午前7:15 起床、朝食
ベッドから起きたら、まず歯を磨いて着替え、朝食を食べます。母が学校まで車で送ってくれます。
午前8:12 授業
1つの授業は47分で、合間の休み時間は5分です。この日の午前は、理科、国語(英語の技能)、デザインまたはアートの選択授業など。

午前11:30 昼食

給食は、ピザ、ベジタリアン用メニュー、メキシコ料理、中華料理などから1つ選びます。週末には自分で昼食を用意することもあります。



午後12:30 授業
この日の午後の授業は、人前で話し方や社交スキルを身につける「アカデミック・リソース」や数学、体育でした。数学はテストの結果によってクラスが分けられます。僕は合唱団と生徒会のメンバーのため、活動がある日は下校が遅くなります。

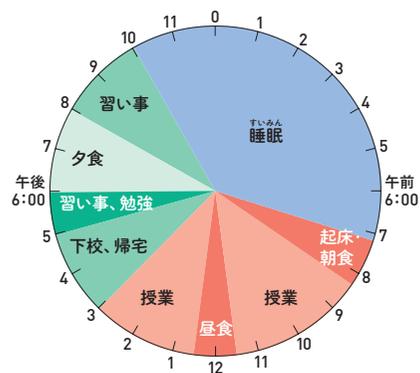
午後3:00 下校、帰宅

家に帰るとバスケットボールをしたり、愛犬のシーザーと遊んだりします。それから宿題をやりま



午後5:00 習い事、勉強

金曜日はピアノのレッスンがあります。



午後6:00 夕食

この日のメインはチキンとチーズを巻いたメキシカンタコス(中央)。



午後8:00 習い事

曜日によってアイスホッケーや体操へ。



午後10:00 就寝



地元のアイスホッケーチームに所属しているコナーさん。週3回練習に励み、腕を磨いているんだ。

世界の友だちの1日
アメリカ
ミシガン州
ノースビル

生徒会もアイスホッケーも大活躍!
大好きな科学を生かせる仕事をしたい!

世界の友だちは、いつだってどんな1日を過ごしているのだろう。日が暮れるまで外で遊んでいる? それとも放課後は塾で勉強しているのかな? 今回はアメリカのミシガン州にあるノースビルに住む12歳のコナーさんにお話を聞いてみました。



ミシガン州

ノースビルって、どんなところ?

面積 およそ5.32km²(ノースビル)
およそ250,420km²(ミシガン州)
人口 およそ6,000人(ノースビル)
およそ1,007万人(ミシガン州)

ミシガン州の州都・デトロイトの北西部にある小さな町。ノースビルでは、20世紀前半から毎年「ヴィクトリアン・フェスティバル」というお祭りが開催されていて、参加者はヴィクトリア朝のような衣装にドレスアップするよ。



ノースビルの中心街(左)とコナーさんの自宅(右)。コナーさんは放課後に中心街まで友だちと散歩するそうです。



英語の「こんにちは!」

Hello(ハロー)!

英語の「ありがとう!」

Thank you(サンキュー)!

ミシガン州最大の都市・デトロイトから車で約30分のところにあるノースビルは、歴史と伝統が感じられる町だよ。住宅地には、イギリス・ヴィクトリア様式の美しい家々が建ち並んでいるんだ。その一方で、市街地にはおしゃれなレストランや映画館、ギャラリーなどもあり、暮らしやすい町として人気だよ。最近では近郊から移り住んでくるファミリー層も多い。その主な理由は、「公立学校のスコア(点数)が高い」から。実はアメリカでは、学校のスコアが10点満点で評価され、一般に公表されているんだ。ノースビルの学校区には、8点以上の高評価の学校が数多くあるよ。

みんなは、「五大湖」を知っているかな? アメリカとカナダの国境付近に連なる5つの湖の総称で、世界で2番目に大きい湖「ステイプル湖」も含まれているよ。この5つの湖のうち、4つに接しているのがミシガン州だ。コナーさんが暮らすノースビルもミシガン州に属していて、車で1時間足らずで五大湖の1つ「エリー湖」に行くことができるよ。そんな自然豊かな環境で、勉強やスポーツ、ピアノ、合唱、生徒会活動……とコナーさんはいろいろなことを頑張っているんだ。コナーさんは、今、「7年生(グレード7)」。これは日本の中学1年生にあたるよ。アメリカでは、一般に幼稚園年長の5歳から義務教育が始まるんだ。その後、小学校で5年、中学校で3年、高校では4年学び、学年(グレード)を通して数える。日本よりも医療費

や物価が高いアメリカだけど、義務教育期間の公立学校の教育費は、原則、無償だよ。「僕が通っている学校では、多くの生徒が毎週数時間ボランティア活動をしています。僕は3年間アイスホッケーの審判として活動しているよ。大好きな友だちと過ごす時間は最高です。」住んでいる場所によって通学する学校が決まるのは日本の公立学校と同じだけど、アメリカでは「学区」単位で学校を運営しているんだ。地域住民が選ぶ「教育委員」を通じて、地域住民の考えが学校教育に反映されるんだよ。とても前向きなコナーさん。将来の夢は? 「今、科学とビジネスに興味があるんだ。12歳だから、将来どんな仕事をするか分からないけど、大好きな科学に関する仕事ができたらいいな。」

第二回 「青いスピンの」作品募集

第二回「青いスピン」作品募集には、240作品の応募がありました。たくさんのご応募、ありがとうございました。厳正な審査の結果、次のとおり受賞作品を決定いたしました。

結果発表

入選作品は、「青いスピン」に掲載いたします。「お花見」は、本誌16ページよりお読みいただけます。「裏道小道恋の道」は、第五号に掲載予定です。



入選

「お花見」春名伶

ある春の夜、午前二時半を回った頃。真白は、弟の雪也に誘われて家を抜け出した。暗い方暗い方へと進んでいくが、不思議と恐怖心はない。どこに行くのか尋ねると、雪也は「お花見だよ。」と答えた。二人は、暗く細い山道を歩き続ける。

「裏道小道恋の道」杉成恵佳

中学生の沙希は、小学生の頃から仲良しの椿ちゃんとバレンタインのチョコを作ることにした。三人組のもう一人だった和久とは、近頃ほとんど話さない。椿ちゃんの家に向かう途中、逃げ出した猫を探し和久にばったり出会う。



佳作

「大地と青ペンさん」豊田愛

大地は、小学六年生になって痛感した。勉強が難しい。ひどい点数のテスト用紙を丸めて捨てていたら、窓から外に飛び出してしまった。慌てて拾いに行つたが見つからず、部屋に戻ると、青ペンで解説が書かれたテスト用紙が落ちていた。

「タマゴボーロの夏」伊東律花

夏休みの夜、親友の里沙が、突然家に泊まりにきた。里沙が背負った大きなリュックには、大量のお菓子が入っていた。「家中のお菓子を持ってきた。真子といっしょに食べつくそうと思って。」と、里沙は言う。

選評

入選「お花見」

●星や光の描写がきれい。亡き弟への思いを幻想的な風景に込めている。亡き弟と書いたけど、文中そのことにあからさまに触れずに、二行ばかりの伏線を感じさせるところがいい。(角野)

●切なく、情感豊かな作品。亡き弟に誘われて花見に向かう情景が浮かんでくる。印象的で、構成もよくできている。(西本)

(西本)

●突出して美しい話。子供に読ませるにはかわいそうだと感じたが、読み応えがある。将来性を感じる作品だ。(安東)

入選「裏道小道恋の道」

●ささやかな青春の恋の物語で、読んでいて楽しい。さわやかで、子供が共感



選考委員 角野栄子先生(童話作家)
撮影 萩庭桂太/©角野栄子オフィス

佳作「大地と青ペンさん」

●「青ペンさん」と積極的につながりを

●まずこのタイトルを思いつき、後から話を付け足したように感じた。この小道の雰囲気を書きこんで書くことができれば、やや力まかせな展開も説得力が増したかもしれない。(角野)



選考委員 安東みきえ先生(児童文学作家)

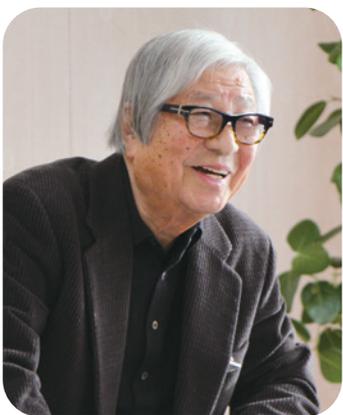
持とうとする主人公のさわやかさは、読み心地がいい。(安東)

●ストーリー展開がおもしろく、興味深い作品。さわやかな友情が伝わってくる。だが、なぜ「青ペンさん」が物置に入っていたのか分かりづらく、リアリティに欠ける。(西本)

(西本)

●ユーモアのある作品で、そこが捨てがたかった。この「青ペンさん」は学校に行っていないらしいとは分かるけど、なぜ物置にいたのか? そのあたりをきちんと書いてほしかった。(角野)

(角野)



選考委員 西本鶏介先生(児童文学作家・児童文学評論家)

●中学生の視点で、家族に関する現代的な問題を描いている。切ない話だが、ストーリー展開はやや新鮮みに欠けるか。(西本)

(西本)

佳作「タマゴボーロの夏」

●どうにもならないことへのささやかな抵抗として、お菓子を食べつくすという点がユニーク。タマゴボーロのもろさと優しさが、物語を深く印象づけている。(安東)

(安東)

●文章のテンポは軽快で、エンディングはいい終わり方だと思う。中学二年生はもつと、対処の仕方が複雑なのではないか。たとえ二行でも、中学二年生らしい会話がほしかった。(角野)

(角野)

●中学生の視点で、家族に関する現代的な問題を描いている。切ない話だが、ストーリー展開はやや新鮮みに欠けるか。(西本)

(西本)

募集内容

小学校高学年から中学生を读者対象とした物語、小説。

応募規定

字数：400字詰め原稿用紙10枚以内。

書式：手書きの場合、400字詰め原稿用紙（縦書き）を使用してください。パソコンの場合、横向きのA4用紙に、縦書きでお願いします。末尾に400字詰め原稿用紙で換算した枚数を明記してください。[手書き・パソコン共通] 原稿用紙の1行目に作品のタイトル、2行目に作者名（ペンネーム、あるいは本名）*をお書きください。本文は3行目から書き始めてください。

A4用紙1枚に次の内容を明記し、同封してください。①作品のタイトル・枚数、②作者名（ペンネーム・本名）、③住所・電話番号・Eメールアドレス、④年齢、⑤職業

*ペンネームの場合は、必ず本名も明記してください。ペンネーム・本名には、読み仮名を付けてください。

注意事項

- 応募資格の制限はありません。ただし、未発表の作品に限ります。他の児童文学雑誌やコンクール等に応募した作品は対象外です。
- 応募作品は第三者の著作権を侵害していないオリジナルの作品に限ります。また一人一点までとします。なお、応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。

締切・発表

締切：2024年8月31日（土）当日消印有効

発表：「青いスピ」第6号（2025年4月発行予定）、およびWEB「青いスピ」

*掲載作品には小社規定の原稿料をお支払いします。なお、掲載された作品の出版権は小社に帰属します。

作品送付先

東京書籍株式会社「青いスピ」作品募集係
〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1

*「公募ガイドONLINE」よりWEB応募できます。

詳しくは、WEB「青いスピ」作品募集ページをご確認ください。



WEB 青いスピ

左のコードか、以下のURLからアクセスしてください。
<https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp>
※インターネットの通信費がかかります。

お問い合わせ

✉ spin@tokyo-shoseki.co.jp

*審査結果に関するお問い合わせには応じられません。

選考委員

にしもとけいすけ 西本鶏介（児童文学作家・児童文学評論家）
あんどう 安東みきえ（児童文学作家）

【応募に関する個人情報の取り扱いについて】東京書籍では、ご提供いただく個人情報の処理について、適切な安全対策を講じ、漏洩、滅失およびき損が生じないようにいたします。つきましては、下記の内容をご理解いただき、ご同意の上で個人情報を提供くださるようお願いいたします。また、16歳未満の方は保護者の同意を得た上でお申し込みください。■個人情報の利用目的・開示：ご提供いただいた個人情報につきましては、次の目的の範囲内で取り扱います。○選考作業および入選等のご連絡のため。○個人情報の属性の集計・分析を行い、個人が特定できないように加工したものを作成し、東京書籍のサービス開発・提供等を行うため。■個人情報について：法令等により必要と判断される場合を除き、本人の同意を得ずに第三者に提供することはありません。個人情報の提供は任意ですが、応募いただくために必要なものです。ご記入いただけない項目がある場合、応募をお受けできない場合がありますのでご了承ください。■委託について：ご提供いただいた個人情報につきましては、選考や書類の発送など利用目的の実施に必要な範囲内で、業務を委託する場合があります。■窓口：ご提供いただいた個人情報に関する質問および変更については、「青いスピ」編集部（spin@tokyo-shoseki.co.jp）へお問い合わせください。

青いスピ 第4号
（2024年 春）
2024年4月1日発行

発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リーブルテック
本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445（営業総務本部） Fax:03-5390-6012
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
名古屋 052-950-2260 大阪 06-6397-1350
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084
ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>

読者アンケート



第4号の「青いスピ」
でおもしろかった作品や、
これから取り上げてほしい
ことを教えてください。

表紙絵 浮雲宇一
アートディレクション 山田和寛(nipponia)
デザイン 山田和寛+竹尾天輝子(nipponia)